

## 現代日本語の「ニ格」に関する補考

キーワード：ニ格 受動文 動作者 動作主 ニヨッテ

菅井三実\*

(平成12年9月12日受理)

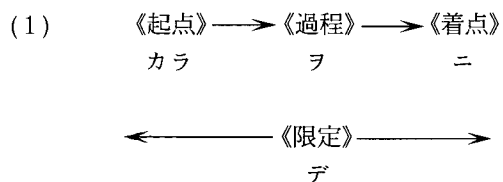
### 0.はじめに

本稿の目的は、現代日本語の与格(ニ格)における[理由][動作者相当句]および[時間]の用法を考察対象とし、関連する言語現象に対して意味的な観点から説明を与えることにある。第1節で「ニ格」の基本的な特性を確認した上で、第2節で[理由]の用法を「カラ格」や「デ格」との対比において検討する。第3節と第4節では、受動文における動作者標識を取り上げ、第3節で複合辞「ニヨッテ」が格助詞「ニ」や「カラ」と修飾関係において異なることを例証し、第4節で受動文における「ニ」と「カラ」の差異を明らかにする。最後の第5節では、時間次元における「ニ格」について空間次元における用法との異同を検討する。<sup>[1]</sup>

### 1.「ニ格」の基本的性質

第1節では「ニ格」の基本的な特性を考察し、経験的なイメージスキーマを援用して意味的な観点から特徴づけを提示する。

先行研究のうち、与格(ニ格)を意味的に特徴づけたものに国広(1967:224)があり、その意義素を《密着性》と規定したが、意義素による規定は絶対的な特徴づけであった。一般に、形式の意味が体系の中で相対的に規定されるという常識的な観点から言えば、「ニ格」の特徴づけも示差的かつ相対的でなければならない。殊に、格が閉じたクラスであることを考えれば、「ニ格」の特徴づけが相対的であるべきことは当然である。この見地から、菅井(1998)では、Johnson(1987:113-117)の《SOURCE-PATH-GOAL SCHEMA》を参考にしながら、「カラ格」および「ヲ格」とともに「ニ格」を次のように特徴づけた。



(1)の上段は「カラ格」「ヲ格」および「ニ格」の位置関

係を図示したものであり、個々の意味役割は、それぞれ《起点》《過程》および《着点》が「具象化(instantiate)」されたものと特徴づけられる。また、下段に付した「デ格」については、菅井(1997)で詳説したように、事象を通じて主格NPや対格NPとの関係に変化を被らないことが内在的な意味と認められるので、「カラ格」や「ニ格」との関係において(1)のように位置づけた。

さて、(1)のスキーマによれば「ニ格」は《着点》が具象化したものと特徴づけられるが、ここでいう《着点》の意味には注意を要する。基本的には、国広(1986:199)がいうように「一方向性をもった動きと、その動きの結果密着する対象あるいは目的の全体」と言ってよいが、具体的な意味役割を総括するためにも、柔軟に程度差を認める必要があり、空間次元について言うと、次の例が示すように、4つの段階が観察される。

- (2)(a) 針金を内側に曲げる。 [方向]  
 (b) 壁にボールを投げる。 [到着点]  
 (c) 壁にペンキを塗る。 [密着点]  
 (d) 調味料をスープに入れる。 [収斂先]

(2)(a)~(d)の「ニ格」に意味役割を与えれば、それぞれ[方向][到着点][密着点][収斂先]ということになる。これらは皮相的に、何ら意味的な統一性がないようにも見えるが、変化主体(自動詞の主格NPまたは他動詞の対格NP)が——程度差をもって——与格NPに近づいていくという点で1つの軸の上に並べることが可能である。このような「ニ格」の性質を具体的に分析するのに有効な概念として、山梨(1994a:106-108)が空間の「ニ格」について提案した《近接性》《到着性》《密着性》《収斂性》という4つの認知的制約があり、次のように連続的に並べることができる。

《近接性》→《到着性》→《密着性》→《収斂性》

これら4つの認知的制約は、独立した要因というより、いわば“一体化”という1つの軸の上で程度差をもった連続体として再解釈することで「ニ格」の分析に有効な概念になる。すなわち、最も左の《近接性》が“一体化”の

\*兵庫教育大学第2部(言語系教育講座)

度合いも最も弱く、右に行くほど“一体化”の度合いが強くなるというものである。これを援用すると、上の(2)の例で、(a)における「針金」と「内側」の関係は、せいぜい「内側」に近づいているということではしかないわけだから最も“一体化”が弱く、《近接性》を満たす程度のもので位置づけられる。(b)では「ボール」が「壁」に到着するというのがデフォルト的解釈であるから《到着性》に位置づけられ、(c)では「ペンキ」が「壁」に到着した上に互いに切り離し得ない状態になるという点で《密着性》に位置づけられる。最後の(d)では「調味料」と「スープ」が混ざり合って明瞭な区分がなくなるので、最も“一体化”の度合いが大きく《収斂性》を満たしているということができる。

同様のことは、非空間次元の「ニ格」にも言える。具体的には、次の(3)(a)~(d)が示すように、自動詞の主格または他動詞の対格と与格NPとの間に“一体化”の関係が成り立ち、同時に、その“一体化”に程度差が認められる。

- (3)(a) 花子を食事に誘った。 [目的]  
 (b) 上司に事情を話す。 [伝達先]  
 (c) 会社が優秀な人材に富む。 [要素]  
 (d) 液体が気体に変わる。 [結果]

(3)(a)では比喩的に「花子」を「食事」に近づけているという点で《近接性》までしか満たさないが、(b)では「事情」が「上司」に到達するという点で《到着性》を満たし、(c)では「会社」と「人材」は不可分の関係にあるという点で《密着性》にまで達しているといつてよい。また、(d)においては「液体」と「気体」が同一の対象であるという点で《収斂性》を満たしているということができる。

かくして、山梨(1994a)のいう《到着性》《密着性》《収斂性》《近接性》を援用することで、空間次元および非空間次元の「ニ格」に認められる主な意味役割は、それぞれ次のように整理することができる。

スケール	空間次元	非空間次元
《近接性》	[方向]	[目的]
↓	↓	↓
《到着性》	[到着点]	[伝達先]
↓	↓	↓
《密着性》	[密着点]	[要素]
↓	↓	↓
《収斂性》	[収斂先]	[結果]

つまり、上から下に向かって“一体化”の度合いが強くな

り、空間次元でも非空間次元でも同じスケールで多様な意味役割を一元的に整理することが可能になるわけである。ただし、下向きの矢印↓は、通時的にも共時的にも「拡張」関係を表すものではなく、本稿でいう“一体化”に関して進捗の方向を示しているに過ぎないことを確認しておきたい。付け加えれば、個々の意味役割は何ら絶対的なものではなく、それぞれの差異は程度問題でしかないというのが本稿の基本的な立場である。

さて、ここで考慮に加えなければならないのが次の例に挙げたような[存在点]であり、空間における他の用法と異なり、見かけ上、位置変化(移動)を伴わない。

- (4)(a) テーブルの上にコップがある。  
 (b) 西の空に美しい虹を見た。

[存在点]という役割は、(a)のように存在詞「ある」を述語とする典型的な存在文だけでなく、(b)のように一般動詞を述語とする文においても認められるが、いずれのケースも、述語動詞に動的な変化が含まれないのに、下線部のNPを「ニ格」で標示することによって“位置づける”という操作が認められることに注意されたい。というのも、次の(5)のように「デ格」と対照させるとき“位置づける”か否かによって弁別的な差異を示すからである。

- (5)(a) 敷地内に小型シェルターを作った。  
 (b) 敷地内で小型シェルターを作った。

(a)のように「敷地内」を「ニ格」で標示したとき「小型シェルター」は「作る」という行為の最終局面において「敷地内」に位置づけられると解釈されるが、(b)のように「敷地内」を「デ格」で標示したときは「小型シェルター」の製作が「敷地内」で行われることを示すに過ぎず、そのまま「敷地内」に位置づけられるという含意はない。かくて、[存在点]の「ニ格」には《密着性》が認められることから、実質的に[密着点]に準じるものとして扱ってよいというのが本稿の分析である。<sup>[2]</sup>

以上、本節では「ニ格」がスキーマにおける《着点》の具象化として特徴づけられ、主格NPや対格NPとの“一体化”に程度差を認めることで主な意味役割が整理できることを確認した。

## 2. 2項的關係と[理由]の意味分析

第2節では、[理由]の用法における「ニ格」と「デ格」および「カラ格」との差異を考察し、格が他の格と2項的な関係を結ぶとの定理を援用しながら、具体的な分析を行う。

前節で述べたように「ニ格」は“一体化”という概念によって意味的に特徴づけられるが、しばしば空間次元においては「デ格」との差異が問題にされる。実際、神尾(1980:61)、城田(1993:78)、竹沢(1995:73)では、例えば、次のようなペアにおいて「ニ格」は主格と結び付くが、「デ格」は「節(出来事)全体を修飾する」と記述される。

- (6)(a) 公園に子どもがいた。  
 (b) 教会で太郎が花子と結婚式を挙げた。

つまり、(b)において「デ格」で標示された「教会」は「太郎が花子と結婚式を挙げた」という出来事全体を含むというものである。しかしながら、空間次元においてさえ「デ格」が「節(出来事)全体を修飾する」という記述は正しくなく、次の例が示すように、実際「デ格」が修飾できるのは原理的に主格NPに限られる。

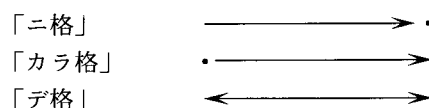
- (7)(a) 花子がベランダで星を眺めていた。  
 (b) 池の辺で父が鯉にエサをやっていた。

(7)(a)において確実に下線部の「ベランダ」にいと解釈されるのは主格の「花子」に限られるのであって、対格の「星」は「ベランダ」にあるとは言い難い。また、(b)の例が示すように「ニ格」成分も場所的な「デ格」領域から外され得る。実際、下線部の「池の辺」にいるのは主格の「父」だけであって、与格の「鯉」は「池の辺」で泳ぐことはできないからである。かくして、空間の「デ格」が常に節全体を修飾するという分析は成り立たず、逆に言えば、他動詞構造において確実に空間の「デ格」が包含すると言えるのは原理的に主格成分に限られる。空間の「デ格」においても原理的には特定の格NPとく2項的に結び付くのであって、この点で「ニ格」と本質的に変わりはないのである。<sup>[3]</sup>

この<格の2項関係>を前提に、以下において、より抽象度の高い[理由]の意味分析を行いたい。具体的には、次の例が示すように「ニ格」は[原因]格的な意味でも「デ格」や「カラ格」と交替し得る。

- (8)(a) 余りの熱さに花子は気を失った。  
 (b) 余りの熱さから花子は気を失った。  
 (c) 余りの熱さで花子は気を失った。

(a)~(c)は、客観的には同じ事象を描写しているものと想定されるが、知的意味において明確な差異があり、究極的には下線部の「余りの熱さ」と主格NPとの関係に帰着される。そこで、第1節の(1)をデフォルメして「カラ格」「ニ格」および「デ格」の特性を視覚的に表し、原理的な意味を確認しておきたい。



「ニ格」は主格NPが一体化していく終点であることを示しており、逆に、「カラ格」は主体が<離脱>していく起点であることを示すものである。また、「デ格」は事態を通じて他の格NPとの間で変化を被らないことを特徴とする。<sup>[4]</sup>

これにより「ニ格」については、次のような例に説明を与えることができる。

- (9)(a) ?? 運転手の不注意に大事故が起きた。  
 (b) 運転手の不注意から大事故が起きた。  
 (c) 運転手の不注意で大事故が起きた。

このとき、(a)の容認度が落ちるのは「運転手の不注意」が主格の「大事故」と一体化しないことに帰着される。山梨(1994b:109-110)も言っているように「ニ格」は[原因]のときも《収斂性》が働くからである。

逆に、[原因]が[主体]と一体化するとの解釈が求められるときには「ニ格」で標示しなければならない。例えば、次のように「弾」によって「人」が「倒れた」という事象を描写するとき、[原因]の「弾」は、人体への《到着》ないし《密着》が想定されるので、(10)(a)のように「ニ格」で標示されなければならない。

- (10)(a) 次郎が弾丸に倒れる。  
 (b) ?? 次郎が弾丸から倒れる。  
 (c) ? 次郎が弾丸で倒れる。

(b)の「カラ格」には《到着性》がないため「弾丸」を「倒れる」の原因と解釈することはできない。また、(c)でも、例えば「弾丸」につまずいて転倒するというような状況を想定すれば容認できないこともないが、それでも不自然さは否めない。

併せて、「カラ格」についても触れておこう。前述のように、「カラ格」はスキーマ的な[起点]の意味から副次的に離脱性をもつ。したがって、次の(11)において、[理由]のNPが主格NPと離れた関係にあるとき、(b)のように「カラ格」だけが容認度において適格であり、(a)や(c)のように各々「ニ格」や「デ格」では順に容認度が低くなる。

- (11)(a) ?? 選挙の敗北に首相が辞意を表明した。  
 (b) 選挙の敗北から首相が辞意を表明した。  
 (c) ? 選挙の敗北で首相が辞意を表明した。

このとき「選挙の敗北」が(b)のように「カラ格」でなければならないのは、[理由]NPが「首相が辞意を表明した」という事象の始まりに位置づけられるという点で「カラ格」の性質と符合するためと理解される。これに対し、(a)のように「選挙の敗北」を「ニ格」で標示できないのは、山梨(1994b: 109-110)が言うように、[理由]の「ニ格」には《収斂性》が働くのに、実際は[理由]の「選挙の敗北」と「首相」が収斂するとは解釈できないためと説明される。また、(c)のように「テ格」で標示したときに容認度が落ちるのは、原義的に「テ格」が事象に対して他の成分との関係に変化を伴わない方法で関与するものであり、「首相が辞意を表明」することと並行して「選挙の敗北」を位置づけることが不自然であるためと説明される。

逆に、次の例が示すように、[理由]のNPが主格NPと離脱するとの解釈が困難になるとき「カラ格」での標示は容認不可能となる。

- (12)(a) 花子が再び癌に倒れた。  
 (b) ?? 花子が再び癌から倒れた。  
 (c) 花子が再び癌で倒れた。

このとき、(b)が容認不可能になるのは「カラ格」が「癌」と「花子」の離脱を含意する一方で、経験的に「花子が倒れる」というとき「癌」と主格の「花子」が離脱するとの解釈が不自然であるためと理解される。他方、(a)のように「ニ格」での標示が成立するのは[理由]の「癌」が主格NPの「花子」に一体化するとの解釈が自然に容認されるためであり、(c)のように「テ格」でも標示され得るのは、「花子が倒れる」という事象において[理由]の「癌」が一貫して作用すると解釈され得るためと説明される。

以上、本節では、空間の「テ格」を含めて「ニ格」「テ格」「カラ格」が主格や対格と2項的に結び付くことを踏まえ、[理由]の用法もスキーマの意味から弁別的に分析できることを例証した。

### 3. 受動文における動作者標識「ニヨッテ」

第3節では、受動文において動作者相当句を標示する「ニヨッテ」「ニ」「カラ」に対し、形態統語的な特異性から複合辞「ニヨッテ」と格助詞「ニ」「カラ」との差異を明らかにする。<sup>15)</sup>

よく知られているように、受動文の動作者相当句は「ニヨッテ」「ニ」「カラ」で交替する。

- (13)(a) 指導教官に直接批判された。

- (b) 指導教官から直接批判された。  
 (c) 指導教官によって直接批判された。

この現象に関し、主要な先行研究として知られる細川(1986)では、まず「ニ」と「ニヨッテ」の差異について、「ニ」が<直接的な関与者>を標示するのに対し、「ニヨッテ」は<間接的な関与者>を標示し<引き起こすもの>を表すと述べている。また、「カラ」については、主語と動作者相当句の両方が「有生(animate)」のとき使用できると記述している。

同時に、細川(1986)は、動詞の意味との関係から次のような形で整理している。

種類	動詞の意味	ニ	カラ	ニヨッテ
動作受身	動作	○	○	×
↕	↕	↕	↕	↕
状態受身	結果・状態	△	×	○

つまり、動詞の意味によって<動作受身>と<状態受身>という対立を措定し、動作受身では「ニ」と「カラ」が用いられ、「ニヨッテ」は用いられない。逆に、状態受身では「ニ」と「カラ」は用いられないか、用いられにくくなり、「ニヨッテ」が用いられるとされる。ただし、注意しなければならないのは、表の中で動詞を意味的に特徴づけている<結果・状態>という概念であり、ここでは“変化を含まない”という意味ではなく、むしろ“動作に伴って結果を強く含意する”とされる点である。実際、例えば「殺す」や「壊す」のような動詞を述語とする受身文も、結果を強く含意するという点で<状態受身>として扱われることになる。

これらの点を含めて、細川(1986)の記述を簡潔に整理すると、「ニヨッテ」は<結果を強く含意する受動文>において<間接的な関与者><引き起こすもの>と特徴づけられ、「ニ」は<動作に力点がおかれる受動文>において<直接的な関与者>と特徴づけられる。また、「カラ」については<動作に力点がおかれる受動文>で<主語と動作者相当句の両方が有生のとき使用可能>と特徴づけられるということになる。

ところが「ニヨッテ」に関して、細川(1986)の分析に反する例が観察される。次に挙げるように、間接的な関与者でもなく、結果を強く含意するわけでもないのに、動作者相当句が「ニヨッテ」で標示されるものである。

- (14)(a) 社員らに目撃されている。  
 (b) 社員らによって目撃されている。

ここで「社員」は直接的な関与者であり、しかも「目

撃する」ことに何ら強い結果の含意は認められない。それにもかかわらず「会社員」は(b)のように「ニヨッテ」での標示が可能であり、これによって、複合辞「ニヨッテ」を特徴づける3つの条件のうち、＜間接的な関与者＞であることと＜結果を強く含意する＞ことは言語事実を正しく反映していないことが分かるであろう。そうすると「ニヨッテ」に関して有効な意味特徴は＜引き起こすもの＞しか残らないということになる。

ここで注目すべきは、そもそも複合辞「ニヨッテ」が格助詞「ニ」や「カラ」と文法的地位において異なり、したがって、修飾機能においても異なる関係が期待されるという点である。実際、第2節で述べたように、「ニ」や「カラ」は純然たる格成分を作るので、周辺の格成分が主要な格成分を2項的に修飾するという原理により、主格や対格と2項的に結び付くのにに対し、複合辞「ニヨッテ」の修飾対象は、格成分というより、主動詞句に収束すると考えてよい。というのも、複合辞「ニヨッテ」は“格助詞「ニ」+動詞「ヨル」の連用形”という動詞句に準じる構造を持ち、それが格標識に文法化されたものであるから、動詞句に格支配されるというより、形態統語的に主動詞句全体と並列されるものだからである。<sup>6)</sup>

いま、複合辞「ニヨッテ」が主動詞句を修飾するという形態統語的な地位を考えると、複合辞「ニヨッテ」の意味については“引き起こすもの”に焦点が当てられるという松田(1986)の分析に理論的な動機づけが与えられることになる。実際 Hopper and Thompson(1984)らが言うように、言語構造において“引き起こす”という機能は動詞の担うものであり、複合辞「ニヨッテ」が動詞を修飾することから自然に導かれるからである。しかも、＜引き起こすもの＞を標示するという意味は「ニヨッテ」にとって固有のものであり、能動文においても広く観察される。

- (15)(a) 今回の臨界事故は人為的なミスによって起きたと言わざるを得ない。  
 (b) 地震発生のメカニズムは多くの研究者によって少しずつ解明が進んでいる。

このような能動文においても、複合辞「ニヨッテ」句は出来事の生起をつかさどる成分であり、意味的にも主動詞にかかっていくと解釈することができる。逆に言うと、受動文で「ニヨッテ」が動作者相当句の標識として用いられるのは、固有の意味として＜引き起こすものを標示する＞ことの結果に過ぎず、能動文でも受動文でも「ニヨッテ」が＜引き起こすものを標示する＞という固有の意味に何ら変わりないと理解してよい。

かくて、複合辞「ニヨッテ」が＜引き起こすものを標示する＞と考えることにより、次のように、受動文にお

いて排他的に「ニヨッテ」しか用いられないケースについても一貫した原理で意味的な説明を与えることができる。

- (16)(a) \* 関係者に記念式典が行われた。  
 (b) 関係者によって記念式典が行われた。

つまり「行う」のように語彙的に行為そのものを表す動詞を述語にした受動文で動作者相当句の格標識が「ニヨッテ」でなければならないのは、受動文全体が出来事の生起として把握されるためというものである。これにより「ニヨッテ」が＜引き起こすものを標示する＞という意味分析に証左が与えられることになる。

最後に、本稿の分析によって説明できる事象を2つ指摘したい。1つは、次の例において、動作者相当句が「ニヨッテ」で標示できない理由の説明である。

- (17)(a) 犬に噛まれた。  
 (b) ?? 犬によって噛まれた。

(b)のように動作者相当句の「犬」を「ニヨッテ」で標示できない理由について、細川(1986)は、動作が行為的で結果の側面が取り上げられていない上に、「犬」は直接的関与者であり、間接的関与者を表す「ニヨッテ」では適合しないためと述べている。しかしながら、上述のように、直接的な関与者であっても「ニヨッテ」で標示することは可能であって、直接的な関与者であることや結果の含意が強くないことは「ニヨッテ」が用いられないことの本質的な理由にならない。本稿の分析によれば、「ニヨッテ」は動詞句全体を修飾し生起をつかさどるものであり、(17)の事象が出来事の生起として解釈することが困難だからであるのに対し、「ニ」で標示されるのは主格NPとの2項的な関係で捉えられなければならないためと説明することができる。

もう1つは、受動化可能性とも関連する問題であるが、次のようなペアの中で、(b)の動作者相当句を「ニヨッテ」で標示したときに限り受動文が成立することに対して意味的な説明を与えることができるというものである。

- (18)(a) \* 教室で担任に机が叩かれた。  
 (b) \* 教室で担任によって机が叩かれた。

- (19)(a) \* 壇上で歳男達に太鼓が叩かれた。  
 (b) 壇上で歳男達によって太鼓が叩かれた。

(18)の受動文が成立しない理由について、細川(1986)は＜できる限り有生名詞句を主語に選べ＞という制約によって処理しようとしているが、このペアで注目すべきは

(19)(b)である。(19)(b)は、主語名詞句が無生である点で(a)と何ら変わりなく、結果の含意がない点でも(18)と変わらないにもかかわらず、動作者相当句を「ニヨotte」で標示したときに限り容認される。このことは、細川(1986)のいうナイーブな制約では説明できず、また“述語が主語の属性を特徴づけるとき受動文が成立する”という益岡(1982)の分析も有効ではない。本稿での分析によれば、出来事の規模が大きくなることでイベントの生起としての解釈が相対的に容易になるためと説明されることになる。重要なことは、件の現象が、主語の「有生性(animateness)」や述語の語彙的意味から一義的に説明されるものではなく、事象をどのように捉えるかという発話者の解釈に帰着されなければならない、この点でも本稿の分析は自然なものと思われる。<sup>[7]</sup>

以上、本節では「ニヨotte」が動詞句を修飾し、動作者相当句の標識として出来事の生起をつかさどるものとして特徴づけられることを例証した。

#### 4.受動文における「ニ」と「カラ」

第4節では、他の格との2項的關係という基本的性質を共有する「ニ」と「カラ」に絞って、両者のスキーマの意味から受動文における意味的な差異を明らかにする。

先行研究のうち、砂川(1984a:77-78)や森田(1988:312)では、受動文の「ニ」について<直接的>に関与するものと記述しているが、この<直接的>という用語には注意を要する。というのも、<直接的>という概念を“他のものを介在させない”と考える限り、次の例が示すように、この意味での直接性は「ニ」と「カラ」を区別することに役立たないからである。

(20)(a) 指導教官に直接批判された。

(b) 指導教官から直接批判された。

つまり、明示的に副詞「直接」が(a)の「ニ」とも(b)の「カラ」とも共起し得るということは、受動文の動作者相当句の標識として「ニ」が“他のものを介在させない”という意味において<直接的>な関与者を標示するのと同じように、「カラ」も<直接的>な関与者を標示し得ることを示している。これにより、<直接的>という概念によって「ニ」と「カラ」を区別するという分析は正しくないことが分かる。

それでは、「ニ」と「カラ」は、どのように差別化されるだろうか。第1節で述べた「ニ格」と「カラ格」のスキーマの意味に遡及すると、「ニ格」は程度の差こそあれ主格NPとの“一体化”が満たされる。ここにTalmy(1985)のいう「エネルギー伝達」という考え方を援用すると、動作者相当句は、少なくとも「ニ」で標示するこ

とによって主格または対格へのエネルギーの到達が保証されるという点で、能動文において主格(ガ格)で標示されていたときと同じ資格をもつと言ってよい。

これに対し、「カラ格」はスキーマ的に[起点]として規定されるので、動作者相当句を広い意味で[起点]として解釈できるときには「ニ」での標示が可能になる。実際、すでに(13)や(20)にも例を挙げているように、動作者相当句を「カラ」で標示した場合でも、基本的に「ニ」での標示も同時に成立するので、動作者相当句に関しては「ニ」が無標の格標識で、「カラ」は有標の格標識と言ってよい。<sup>[8]</sup>

この「カラ」での格標示に関連して、興味深いと思われる例に次のようなペアがある。

(21)(a) 太郎は隣の人に話を聞かれた。

(b) 太郎は隣の人から話を聞かれた。

このとき、(b)のように動作者相当句「隣の人」を「カラ」で標示した場合は、「隣の人」から「太郎」への働きかけのみが前景化され、逆向きの「太郎」から「隣の人」へのエネルギー(情報)の伝達は含意しない。これに対し、(a)のように「隣の人」を「ニ」で標示した場合は「隣の人」から「太郎」への働きかけが前景化される一方で、「太郎」の意志と無関係に「隣の人」へのエネルギー(情報)の伝達も起こり得る点に注意されたい。ここで「太郎」の意志と無関係に「隣の人」へのエネルギー(情報)の伝達が起こるとするのは、例えば、偶然に「太郎」の話を「隣の人」が耳にした場合であるとか、あるいは「隣の人」が意図的に「太郎」の話にそば耳をたてたというような場合を想定すればよいだろう。そうすると、「カラ」で標示したときは《動作者相当句→主格NP》という一方向的な解釈しかあり得ないのに対し、「ニ」で標示したときは《動作者相当句→主格NP》と《主格NP→動作者相当句》という両方向をもつことが分かる。このことが、「ニ」と「カラ」の本来の意味に起因することは言うまでもない。そもそも、能動文において主格(または対格)と与格NPとの間には《主格NP→与格NP》という順方向性があり、それが受動化に際して《与格NP→主格NP》という逆方向性を担ったものであるのに対し、奪格(カラ格)と主格または対格の間では一義的に《奪格NP→主格NP》という逆方向性しかないからである。

また、「カラ」は、第2節でも触れたように、[起点]を具象化するという本来の意味から、副次的に離脱を含意する。このため、エネルギー伝達の可否という点から見ると、「カラ」での標示は主格や対格と離脱した状態をプロファイルすることになり、エネルギー到達が保証されなくなる。したがって、次のように、主格または対

格へのエネルギーの到達が保証されなければならないときは義務的に「に」で標示される。

- (22)(a) 太郎は何人かの人に襲われる。  
 (b) \* 太郎は何人かの人から襲われる。

この受動文で、動作者相当句を「カラ」で標示できないのは「襲う」といった事象において、動作者相当句を主格成分あるいは対格成分と離脱した関係でコード化することが不適切であるためと説明される。<sup>[9]</sup>

上述のように、動作者相当句は、基本的に「ニ」で標示され、[起点]として解釈できるとき「カラ」での標示が可能になる整理できる。では、動作者相当句を「ニ格」で標示できないケースはあるだろうか。張(1995)も言うように、動作者相当句を「ニ格」で標示できない例というのは非常に稀であり、次のようなケースに限られる。

- (23)(a) \* 類語辞典が先生に編纂された。  
 (b) 類語辞典が先生から編纂された。  
 (c) 類語辞典が先生によって編纂された。

- (24)(a) ?? 資料が秘書に配布された。  
 (b) 資料が秘書から配布された。  
 (c) 資料が秘書によって配布された。

- (25)(a) ?? 事実関係が部長に報告された。  
 (b) 事実関係が部長から報告された。  
 (c) 事実関係が部長によって報告された。

(23)のように生産動詞を述語とする受動文において「ニ格」NPは「編纂」することによる産物として解釈される可能性があるため容認度が下がり、(24)や(25)のように、それぞれ移動動詞や伝達動詞を述語とする受動文においても「ニ格」NPは[着点]として解釈される可能性が文全体の意味解釈を不安定にする。つまり、無標の能動態において動詞が「ニ格」に[着点]の解釈を要求するとき《主格NP→与格NP》という順方向的なエネルギー伝達は、明確にキャンセルされない限り、受動化された段階でも保持されるので、順方向的な解釈と逆方向的な解釈との間で曖昧になる。しかも、堀川(1988)が言うように、順方向的な解釈が優先されるために、(23)~(25)においては「ニ」標示の方の容認度が低くなる。このとき、動作者相当句は[起点]として「カラ」で標示されるか、事象全体を<引き起こす>ものとして「ニヨッテ」で標示することで、曖昧性による不安定性が解消されることになる。

かくして、第3節および第4節での議論から、受動文における動作者相当句標識としての「ニヨッテ」「ニ」「カ

ラ」は次のように整理される：

- ニヨッテ 主動詞句全体を修飾し、出来事の生起を引き起こすものをプロファイルする。  
 ニ 主格または対格を修飾し、主格または対格へのエネルギーの到達が保証される。  
 カラ 主格または対格を修飾し、[起点]としての解釈が強くなることに動機づけられる。副次的に離脱の意味が生じるために、主格または対格へのエネルギーの到達はない。

つまり、受動文全体が出来事として解釈されるとき、動作者相当句は<出来事を引き起こすもの>として「ニヨッテ」で標示される。また、主格NPと動作者相当句とが2項的に結び付くとき、動作者相当句は基本的に「ニ」で標示され、動作者相当句が[起点]として解釈できるとき、あるいは、主格NPと動作者相当句とが離脱した状態にあることをプロファイルするとき動作者相当句は「カラ」で標示されるということになる。

以上、本節では、受動文における「ニ」と「カラ」について、主格NPとの2項的な関係によって区別されることを例証した。

### 5.時間次元の「ニ格」と「デ格」

最後の第5節では、時間次元における「ニ格」を取り上げ、「デ格」との差異を明らかにしながら、空間の用法との異同について検討する。

時間次元の「ニ格」は、山梨(1995:61)が指摘するように《空間から時間》への隠喩的拡張により時間領域への拡張が認められる。このことは、次のような例によって具体的に確認できる。

- (26)(a) 裏庭に小型シェルターを作った。  
 (b) 2月に小型シェルターを作った。

(26)(a)で「シェルター」が「裏庭」に位置づけられると解釈されるのは第1節で述べたとおりである。(b)のような時間次元の「ニ格」は、空間領域において点的な位置を指定するという特性が時間領域に写像され、出来事を時間軸上に指定した一点に位置づけるものと分析できる。この関係は次のように図示される：



2月

このことは、時間表現の格標示に関する記述に理論的な動機づけを与える。具体的には「ニ格はニ格につく名詞の表す時点を1点で指すのに対し、デ格はデ格につく名詞の表す時点までの経過を含意して達成・到達点として表す」という岩崎(1995:78)の記述であり、実際、時間次元の「ニ格」と「デ格」との意味的な差異は次のように例示される。

- (27)(a) 事件は明日の午前0時に時効を迎える。  
 (b) 事件は明日の午前0時で時効を迎える。

(a)は、出来事全体として時間軸上の「午前0時」に位置づけるものであるのに対し、(b)では「午前0時」を指定することによって設定される時間的背景の中で出来事が成立するものと解釈される。ただ、空間次元における[存在点]の「ニ格」が主格NPまたは対格NPを位置づけるものであったのと異なり、時間次元の「ニ格」は結果的に出来事全体が位置づけられる。このことは、同一の動詞句の中で主格NPや対格NPが他の格成分と異なる時間に存在するということがないためであって、時間の「ニ格」が空間の「ニ格」と決定的に異なるためと考える必要はない。

実際、次のペアが示すように、出来事の生起を表す文では、(a)のように下線部の格標示は「ニ格」でなければならない。

- (28)(a) 平成7年1月に大きな地震があった。  
 (b) ? 平成7年1月で大きな地震があった。

この例では「地震」の生起について描かれているので、時間NPは(a)のように「ニ格」で標示されなければならない。逆に、(b)が容認されないのは、時間軸上の点的な位置を何ら指定していないためと説明できる。時間次元の「デ格」は時間的な幅をもつからである。

逆に、時間の「ニ格」は、生起する出来事に対し、時間軸上の位置を点的に指定するものであるから、適切に位置づけられる事象は、森田(1989:887)が言うように、行為作用の成立時点、継続行為の開始や終了、瞬間的動作の生起であって、次の(29)(a)のように継続しているものは適さない。

- (29)(a) \* 会議が夜9時に続いた。  
 (b) 会議が夜9時まで続いた。

つまり、(a)が非文になることから、時間の「ニ格」は継続的な事象を位置づけることができず、継続は(b)のように「マデ」でなければならないことになる。<sup>[10]</sup>

ところで、格の用法において、空間次元から時間次元への隠喩的拡張は一般的なものと理解されているが、空間次元と時間次元で、次のような非対称性も観察される。

- (30)(a) ?? マラソンは競技場にスタートする。  
 (b) マラソンは競技場からスタートする。  
 (31)(a) マラソンは9時にスタートする。  
 (b) マラソンは9時からスタートする。

空間には方向性がないので、(30)(a)のように位置を指定して「ニ格」で標示しただけでは動詞「スタートする」の意味に合う[起点]の解釈が成立しないのに対し、時間には「一方向性(unidirectionality)」が内在しており、(31)(a)のように、時間軸上の点を「ニ格」で指定すれば、動詞「スタートする」の語彙的な意味に応じて[起点]としての解釈が成立する。この点で、時間次元の用法は空間次元の構造を完全には保持しないことになる。

最後に、時間表現の「ニ格」標示とゼロ標示について触れておきたい。時間表現のゼロ標示については、中村(1995, 1997)で「近接性」という観点から、発話時点に近いものほどゼロ標示になりやすいとの興味深い分析が提出されているが、次のような差異も観察される。

- (32)(a) 春、雪が溶けて花は新芽を出します。  
 (b) ?? 春に雪が溶けて花は新芽を出します。  
 (33)(a) ? 春、会ったときは元気そうだった。  
 (b) 春に会ったときは元気そうだった。

上の(32)のペアでは、(a)のように文頭の副詞句が「ニ格」で標示されないとき「春」は不定で、毎年の事象を描いているように解釈されるのに対して、(b)のように副詞句に「に」がつくと「春」の指示が固定され「当該の年の春」に限定されるように思われる。逆に、(33)のペアでは、(b)のように「に」がつくと、常に直示的な解釈をうける。

以上、本節では時間次元の「ニ格」が、出来事が位置づけられる時間軸上の点を指定することを確認し、時間が一方向性をもつ分だけ空間の用法と違いが出ることを確認した。

## 6. 結語

本稿は、現代日本語の「ニ格」に認められる[理由][動作者相当句][時間]を考察対象として、意味的な観点から分析を行った。本文で議論した内容は次のように要約される：



- [i] 現代日本語の「ニ格」は《起点→過程→着点》というスキーマの《着点》として相対的に意味的な特徴づけが与えられる。個々の意味役割は《着点》への程度差によって一元的に整理される。
- [ii] 格が他の格の2項的に結び付くことを認めると、[理由]における「ニ格」「デ格」「カラ格」は各々の内在的意味によって弁別的に区別される。
- [iii] 受動文の動作者相当句標識のうち、複合辞の「ニヨッテ」は出来事の生起をつかさどる要素を標示し、この点で、格助詞「ニ」「カラ」と形態統語的に異なる。また、「ニ」は主格または対格へのエネルギーの到達が保証されるのに対し、「カラ」は主格または対格へのエネルギーの到達はない。
- [iv] 時間次元においても空間次元の意味を継承するが、時間が一方向性をもつ点で空間との差異を生む。

以上により、本稿で取り上げた[理由][動作者][時間]は、菅井(2000)で議論した[着点][結果][存在点]などの拡張用法として意味的に特徴づけられることになる。最も重要なことは、現代日本語の「ニ格」は、[理由][動作者相当句][時間]を含め、一貫した原理で有機的に結び付いているのであって、決して偶然によるものではないという点である。

## 注

- [1] 本稿は内容的に菅井(2000)に接続するもので、前稿で割愛した[理由][動作者相当句]および[時間]の3つの意味役割を、前稿での分析の延長線上に位置付けることによって、「ニ格」の包括的な分析が示されることになる。このため、第1節が前稿の内容と重複することをご容赦願いたい。
- [2] (5)における(a)と(b)の差異が空間的なスコープの相違によるものでないことは、第2節で確認する。
- [3] 立川(1995:195)によれば、格を「2つの対象間の関係を表現するコテゴリー」と明確に述べたのは、イェルムスレフの『格のカテゴリー』に遡及するという。原典は“La catégorie des cas,” Acta Jutlandica, Vol.7, pp.i-xii, pp.1-184, Vol.9, pp.i-vii, pp.1-78, 1935-7.で、その再版にLa catégorie des cas: étude de grammaire générale. (Internationale Bibliothek für allgemeine Linguistik ; Bd.25). München : Wilhelm Fink Verlag, 1972. がある。筆者は未見であるが、内容的には立川(1988, 1990, 1995)に解説がある。
- [4] 奪格(カラ格)の離脱性については、稿を改めて包括的に議論すべきであるが、部分的には、菅井(1999)

- の第4節および菅井(2000)の第4節において、それぞれ「ヲ」および「ニ」との対比において論証した。
- [5] 能動文において主格で標示されていたNP成分が受動化によって主格の地位を失ったとき、本稿では「動作者相当句(agent-like)」と呼ぶことにする。受動文において「ニ」や「ニヨッテ」などで標示される成分は、能動文における主格成分とは知的意味において異なることを見失わないための措置である。
- [6] ただ、複合辞「ニヨッテ」の文文化が進んで、格標識に近づくほど、他の格との2項関係は強くなる。実際、例えば「時間割は履修科目数によって異なる」のような用法では、すでに<引き起こすもの>という原義が希薄化し、2項的な関係が成立していると言ってよい。
- [7] 砂川(1984b)は「ニ」と「ニヨッテ」を、それぞれ<動作主>と<動作のよりどころ>と規定しているが、本稿の分析によれば<動作のよりどころ>といった曖昧な概念は必要ない。
- [8] ただ、本稿でいう“広義の起点”をどこまで認めるかについては、詳細な検討が必要である。この点に関しては、例えば「担当者から詳細をご説明します」のような能動文における「カラ格」の用法と併せて、稿を改めて議論したい。なお、森(1997)では、動作者相当句を標示する「カラ」について、イメージスキーマを援用して包括的な記述を試みている。
- [9] 「カラ」に関連して、細川(1986)は“動作の受動文で主語と動作者の両方が「有生(animate)」のとき「カラ」が用いられる”と記述しているが、この記述は、例えば「\*多くの人から知られている」のような例が非文になることによって反証される。なお、佐伯(1987a, 1987b)は、離脱性が充填されるとき「カラ」での標示が可能になると分析している。
- [10] 「デ格」が時間次元で用いられる用法には2種類がある。1つは「3週間で」のように名詞それ自体が期間を表すものときであり、もう1つは「来月末で閉店する」のように時期を標示するものである。いずれの場合も、「デ格」句は時間的な幅をもつ。

## 参考文献

- 岩崎 卓 1995 「ニとデ——時を表す格助詞」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法』くろしお出版, pp.74-82.
- 神尾昭雄 1980 「『に』と『で』——日本語における空間的位置の表現」『言語』第9巻・第9号(1980年9月号), pp.55-63.

- 国広哲弥 1967『構造的意味論日英両語対照研究』三省堂。  
 1986「意味論入門」『言語』第15巻・第12号(1986年12月号), pp.194-202.
- 佐伯哲夫 1987a「受動態動作主マーカー考(上)」『日本語学』第6巻・第1号(1987年1月号), pp.100-106.  
 1987b「受動態動作主マーカー考(下)」『日本語学』第6巻・第2号(1987年2月号), pp.97-105.
- 城田 俊 1993「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, pp.67-94.
- 菅井三実 1997「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127(文学43), pp.23-40.  
 1998「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」『名古屋大学文学部研究論集』130(文学44), pp.15-2.  
 1999「日本語における空間の対格標示について」『名古屋大学文学部研究論集』133(文学45), pp.15-31.  
 2000「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第20巻・第2分冊, pp.13-24.
- 砂川有里子 1984a「『ニ』と『カラ』の使い分けと動詞の意味構造について」『日本語・日本文化』(大阪外国語大学研究留学生別科)第12号, pp.71-86.  
 1984b「〈に受身文〉と〈によって受身文〉」『日本語学』第3巻・第7号(1984年7月号), pp.76-87.
- 竹沢幸一 1995「『に』の二面性」『言語』第24巻・第11号(1995年11月号), pp.70-77.
- 立川健二 1988「キルケゴール、ブレンダル、イエラムスレウ——〈デンマーク構造主義〉にかんする覚書」『現代思想』第16巻・第5号(1988年5月号), pp.151-181.  
 1990「《形態論》から《形態素論》へ——ルイ・イエラムスレウの用語法の語彙論的アプローチ——」『人文研究(フランス語・フランス文学)』大阪市立大学, 第41巻・第6号, pp.1-34.  
 1995「世界は言葉のなかに存在する——言語とその主体」『脳・心・言葉』光文社, pp.161-222.
- 張 麟声 1995「ニとカラとニヨッテ——受身文における動作主マーカー——」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法』くろしお出版, pp.131-140.
- 中村ちどり 1995「日本語の時間指示表現における近接性と格助詞」『言語処理学会第1回年次大会発表論文集』pp.365-367.  
 1997「時の状況語における『に』の生起要因」『東北大学留学生センター紀要』第3号, pp.41-50.
- 細川由紀子 1986「日本語の受身文における動作主のマーカーについて」『国語学』第144輯, pp.113-124.
- 堀川智也 1988「格助詞『ニ』の意味についての一考察」『東京大学言語学論集 '88』pp.321-333.
- 益岡隆志 1982「日本語受動文の意味分析」『言語研究』第82号, pp.48-64.
- 松田剛史 1986「受身文の『によって』」『大谷女子大國文』第16号, pp.129-141.
- 森 雄一 1997「受動文の動作主マーカーとして用いられるカラについて」『茨城大学人文学部紀要・人文学科論集』第12号, pp.83-99.
- 森田良行 1988『日本語の類意表現』創拓社。  
 1989『基礎日本語辞典』角川書店。
- 山梨正明 1994a「日常言語の認知格モデル[2]——格解釈のゆらぎ」『言語』第23巻・第2号(1994年2月号), pp.100-105.  
 1994b「日常言語の認知格モデル[4]——認知的視点の投影と言語理解」『言語』第23巻・第4号(1994年4月号), pp.106-111.  
 1995『認知文法論』ひつじ書房。
- Hopper, P.J. and S.A. Thompson 1984 "The discourse basis for lexical categories in universal grammar," *Language*, Vol.60(4), pp.703-52.
- Johnson, Mark 1987 *The Body in the Mind*. Chicago and London : The University of Chicago Press.
- Talmy, L. 1985 "Force dynamics in language and thought," *CLS*, 21(2), pp.293-337.

**Supplementary remarks on the Japanese dative (-*ni*) case**Key words : dative, passive, agent, Japanese, *-niyotte*

Kazumi SUGAI

The present paper is devoted to showing that the Japanese dative (-*ni*) case is comprehensively analyzed in semantic terms, focusing itself upon its semantic roles [REASON], [AGENT-LIKE] and [TIME]. The first section illustrates that all the semantic roles of the case are characterized as realizations of the goal on the source-path-goal schema to some great or small extent. In the second section, the *-ni* case for [REASON] is proved to differ from *-de* and *-kara* in that it reaches the nominative NP in the abstract sense. The third section differentiates *-ni* for [AGENT-LIKE] from the compound form *-niyotte* morphosyntactically and semantically in that *-niyotte* marks the noun phrase that brings about the event predicated by the predicative verb. The fourth section differs *-ni* from *-kara* in that the former marks the agent-like NP when the NP transmits energy to the nominative NP, whereas the latter marks the agent-like NP when the NP is profiled as away from the nominative NP. In the final section the dative case for [TIME] is analyzed as analogous to the dative for [LOCATION] at the spatial dimension, while [TIME] is distinct from [LOCATION] in that time is unidirectional in nature.

Throughout the text it is maintained that [REASON], [AGENT-LIKE] and [TIME] are unified in the same way as [GOAL], [RESULT] and [LOCATION] are characterized in Sugai(2000).